

日本経済新聞

喫煙や飲酒、運動不足こそがんリスク大 原発所員に語る



東京電力ホールディングスの柏崎刈羽原子力発電所（新潟県）を11月に訪ねました。再稼働の準備が整った6号機を見学後、「放射線とがんのすべて」をテーマに発電所員の皆さんにお話しする機会を得ました。

普段は立ち入ることが難しい、原子炉格納容器と中央制御室も見せてもらいました。専門的な訓練を受けた同社の発電所員が24時間体制で、原子炉の監視を続けていました。安全設備を常に動かせる状態に保ち、真剣な表情で計器を見守る姿に、電気は人の不断の努力で支えられていることを痛感しました。

同原発では福島第1原子力発電所事故の教訓を踏まえた安全対策が実施されていました。海拔15メートルの防潮堤や高台の電源車、消防車といった可搬型の送水設備など多様な設備が設置されました。

新たな設備は維持管理とともに、緊急時に対応できる体制の整備が必要です。発電所員の方々が年に10回以上「緊急時総合対応訓練」を重ねていると聞き、安全性追求の姿勢を感じました。

見学後の講演で「がんの原因の多くは生活習慣」をテーマに話しました。たばこや（私のような）大量飲酒が、2千ミリシーベルトの全身被曝（ひばく）に相当するリスクを招くことも伝えました。

発電所員は放射線を多く浴びているとの印象があるかもしれませんが、所員の平均被曝線量は年間1~2ミリシーベルトほどとのこと。広島や長崎の原爆による長期影響調査でも、被曝線量が100ミリシーベルト未満だとがんによる死亡率の増加は認められていません。むしろ、喫煙や運動不足といった望ましくない生活習慣があるほうが、がんになる確率ははるかに大きいのです。

新潟県の花角英世知事も、柏崎刈羽原発を同じ日に訪れていました。安全対策と緊急時対応を中心に、実物大の中央制御室シミュレーターでは運転員の事故対応訓練を、6号機原子炉建屋内では電源ケーブルの敷設訓練を視察していました。知事は11月下旬に6号機の運転再開を認める意向を示しました。今後は県議会で判断されることになります。

新幹線で東京に戻る道中、車窓からビルの明かりを眺めつつ思いました。柏崎刈羽原発が再稼働すれば、その電力の多くは東京に送られます。関東圏に住む私たちは日々の暮らしで新潟県でつくられた電気の恩恵を享受しています。

放射線治療装置は大量の電力を必要とするため、廉価で安定した電力供給はがん治療にも不可欠です。原発の再稼働は地域の方々の安全性向上に向けた努力のもとで、都市の生活、さらには医療の継続に深く結びついています。まさに生命線だと胸に刻みました。

2025年12月3日